

旧南洋群島における日本委任統治期の建築物の残存状況 - 2001～2003年の現地調査結果 -

熊本県立大学環境共生学部

辻原 万規彦

1. 研究をはじめた経緯

- ・暑熱地帯である南方地域の室内環境調整の工夫(住まい方の工夫)を現代に応用し、省エネルギー化を図れないか?特に、戦前期の南方進出に伴う日本人の建築活動を扱えば参考になるのではないか?

電気を使った冷房などはない時代のことであり、なおかつ本来は南方に適応していない日本人が、生活の中から生み出した工夫が見つからないだろうか?

- ・南方地域の中でも、まずは、南洋群島に注目した。しかし研究を始めてみると、日本委任統治時代の建築物に関する調査や研究の蓄積が殆どないことがわかった。

まずは、当時の建築物の残存状況を明らかにすることから始めて、建築活動全般を明らかにしたい。

2. 調査研究の方法

旧南洋群島における建築物の残存状況を明らかにするために、以下のような手順で調査を進めている。なお、得られた成果は、できるだけ地元へ還元するよう努力している。

- 1) 建築物の残存状況を調査し、地図上へプロットを行い、残存状況を示す地図を作製する。

第0段階 地図を入手する。

第1段階 車で対象地域を何度も回り、ビデオを回して記録すると共に、全体像を把握する。

第2段階 日本でビデオを確認して、地図を作製し、修正する作業を繰り返す。

第3段階 最終的には、対象地区を全て歩いてチェックし、あわせて該当する建築物を写真などで記録する。

第4段階 最終的な地図を作製する。

- 2) 残存している建築物の実測採寸を行い、図面を作成する。

第0段階 ビデオや写真で、対象建築物をできるだけ数多く撮影しておく(様々な方向から)。

第1段階 日本に戻ってから、ビデオや写真からおおまかな立面図をおこし、寸法線を入れておく。

第2段階 現地で実測採寸を行う。許可が必要な場合もあるが、概して好意的であった。

第3段階 帰国後、CADによるデジタルデータ化を行う。

- 3) 主に日本国内に残る文献や写真資料などを用いて、残存している建築物の設計者や施工年代などの詳細な情報を把握する。

3. これまでの調査研究の概要

2000年度

- ・当初のターゲットは、「戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法」であった。

- ・研究の枠組みを示すために、研究報告として『「南方建築」に用いられた室内環境調整手法』をまとめた。
- ・日本建築学会の会員名簿や人事総覧を用いて、旧南洋群島に関係する建築技術者を洗いだし、研究報告として『南洋群島における建築組織について』をまとめた。

2001年度

- ・7月7日～29日に最初の現地調査を行った。
まずは、全体像を把握することを目的として、サイパン、パラオ、ヤップ、グアム、テニアン、ロタ、チューク(トラック)、ポーンペイ(ボナベ)を順に回った。
ヤップでようやく方向性が見え、建築物の残存状況を調査し、実測図面を作製する作業を開始した。
ヤップ、テニアン、ロタならびにポーンペイでは、幾つかの建築物の実測調査を行った。
- ・現地調査を受けて、次の研究報告をまとめた。『ヤップ島に現存する日本委任統治時代の建築物(1)』、『南洋群島における建築物の床下の構造について』、『旧南洋群島への建築技術の伝播(1)』。
- ・品川白煉瓦、日本郵船歴史資料館、アジア・太平洋資料室、沖縄県公文書館史料編集室などで聞き取り調査や文献収集を行った。南洋庁土木課技師であった山下弥三郎様のご子息に聞き取り調査を行った。

2002年度

- ・4月1日～7日に第2次現地調査を行った。サイパン・チャランカノア地区とテニアン・サンホセ地区を対象とした。
本格的な実測調査の開始であり、旧南洋興発社宅群などの実測調査、地図の作製、当時を知る人への聞き取り調査などを行った。
- ・7月11日～28日に第3次現地調査を行った。パラオ・コロール地区とヤップを対象とした。
パラオでは、比較的大規模な建築物の実測調査を行い、ヤップでは、コロニアの地図がほぼ完成した。
- ・現地調査を受けて、次の研究報告をまとめた。『パラオ・コロールにおける日本委任統治時代の建築物の残存状況と旧パラオ支庁庁舎』、『旧パラオ医院本館と旧南洋庁観測所および気象台庁舎について』、『サイパン・チャランカノア地区に残る日本委任統治時代の建築物(1)』、『テニアン・サンホセ地区に残る日本委任統治時代の建築物(1)』。
- ・『パラオに残る日本委任統治時代の建築物』(『パラオ共和国 - 過去と現在そして21世紀へ -』所収)を分担執筆した。
- ・気象庁図書室や国会図書館などで文献収集し、再び山下様や当時を知る方への聞き取り調査を行った。

2003年度

- ・(2003年)3月16日～23日に第4次現地調査を行った。サイパン・チャランカノア地区、テニアン・サンホセ地区ならびにロタ・ソンソン地区を対象とした。
さらに幾つかの建築物の実測調査を行い、それぞれの地区の地図もほぼ完成した。
- ・8月16日～28日に第5次現地調査を行った。パラオ・コロール地区を対象とした。
現国会議事堂などの実測調査を行った。また、地図の作製に全力をあげるも、未完成に終わった。現地新聞に私たちの調査を紹介していただいた。

- ・現地調査を受けて、次の研究報告などをまとめた。『ロタ・ソンソン地区に残る日本委任統治時代の建築物』、『パラオ・コロールにおける日本委任統治期建築物の現存状況』。
- ・国会図書館などで文献収集し、国内の当時を知る方への聞き取り調査も継続して行った。
- ・月島機械(株)で、旧南洋興発の製糖工場などの図面を確認し、写しを入手した。これまで、旧南洋群島の建築物の図面はほとんど確認されていなかった。特に、大規模建築物に関しては、初めての確認である。

2004年度(予定)

- ・8月中旬に第6次現地調査を行う予定である。対象はパラオ・コロール地区とする予定である。

4. 現地調査結果の詳細と検討

パラオ

- ・南洋庁パラオ支庁(後に西部支庁)庁舎：RC造一部地下1階一部地上2階建。昭和13年～14年頃の建設か。設計者は山下弥三郎か。現在は、2階部分などを増築し、パラオ最高裁判所として使用。
- ・パラオ医院本館：RC造平屋建。昭和6年～7年頃に建設か。設計者は不明だがトラック医院の設計者と同一か。外科室のタイルが現存。現在は、パラオ・コミュニティ・カレッジのメインオフィスとして使用。
- ・南洋庁観測所庁舎：RC造一部2階建。2階部分より西側は昭和4年7月に増築。設計者は不明。現在は、2階部分を大きく増築し、ペラウ国立博物館として使用。新博物館完成後、取り壊しとの情報も。
- ・南洋庁气象台庁舎：RC造一部2階建+木造(2階部分)。昭和13年7月以降に建設。設計者は山下弥三郎か。現在は、焼失した2階部分を建て直して、社会文化省の庁舎として使用。
- ・電信所発電室?：煉瓦造2階建か。昭和12年以前に建設。設計者は不明。現在は、国会議事堂として使用。
- ・南洋拓殖の寮の基礎?：コンクリート製。2002年12月頃撤去。詳細不明。今後の検討課題。
- ・夕日ヶ丘の官舎街の官舎の基礎：コンクリート製。建設年代などの詳細は不明。今後の検討課題。
- ・木工徒弟養成所の生徒寄宿舎の基礎：コンクリート製。昭和5年頃、生徒の実習により建設か。
- ・熱帯生物研究所の基礎：コンクリート製。研究所内の建物配置などは不明。昭和10年3月以降に建設か。

ヤップ

- ・マキ公学校校舎の基礎：コンクリート製。昭和2年2月建設、昭和6年度増築。群島内でも大規模。
- ・マキ公学校校長官舎の基礎：コンクリート製。昭和2年に建設か。少なくとも昭和7年には存在。
- ・マキ公学校教員官舎の基礎：コンクリート製。昭和2年2月建設。
- ・コロニアの一戸建官舎と二戸建官舎：RC造平屋建。大正15年～昭和3年頃の間建設か。大正14年の台風被害を受け、コロニアに多くのRC造の建築物を建設。RC造の官舎は、同時期の日本本土でも見られない可能性もあり。現在は、一部の官舎は増築などして住居として使用。放置されたままの官舎もあり。
- ・ガチャパルの巡査駐在所の基礎：コンクリート製。昭和14年4月以降に建設か。「南洋庁巡査駐在所標準型設計図乙号型」(審査山下(弥三郎)、設計製図仲摩、昭和14年4月)の平面図を線対称に変更。

サイパン

- ・南洋興発常務社宅：RC造平屋建。大正14年～昭和7年間に建設か。設計者などの詳細は不明。『南洋興

亜発株会社 興発記念砂糖になるまで』(昭和7年)に写真が掲載。現在は、住居として使用。

- ・南洋興発高級社宅：一部RC造一部木造平屋建。建設年代などは不明。現在は、一部住居として使用。
- ・南洋興発二戸建社宅と四戸建社宅：壁式RC造平屋建。建設年代などは不明。壁式とは言え、RC造の社宅は、同時期の日本本土でも見られない可能性もあり。現在は、一部の社宅は、住居として使用。
- ・南洋興発サイパン製糖所発電室？：RC造2階建。建設年代や設計者などは不明。月島機械所蔵のポナベ酒精工場の発電室の図面に酷似。現在は、マウント・カメル高校の倉庫として使用。
- ・教員官舎：木造平屋建。建設年代などの詳細は不明。日本委任統治時代の木造建築の数少ない現存例。
- ・南洋興発サイパン本社屋の一部？：RC造平屋建。裏付け資料は未見。建設年代や設計者などの詳細は不明。現在はマイクロネシアン・リーガル・サービスのオフィスとして使用。
- ・南洋興発サイパン製糖所附属医院関連の建築物？：RC造平屋建。合計3棟。建設年代や当時の用途などの詳細は不明。現在は、2棟は倉庫として、1棟は市議会議場として使用。

テニアン

- ・南洋興発テニアン製糖所工場事務所：RC造平屋建。昭和9年12月以降の建設。現在は、放置されたまま。
- ・南洋興発テニアン製糖所糖度分析所：RC造2階建。昭和8年6月頃～9年7月頃に建設か。パイナップルをモチーフとした装飾が特徴。設計者などの詳細は不明。現在は、放置されたまま。
- ・南洋興発テニアン製糖所所長社宅：一部RC造一部木造平屋建。現在は、住居として使用。
- ・テニアン町消防組と警防団：昭和7年9月以降の建設か。詳細は不明。現在は、放置されたまま。
- ・テニアン小学校校舎：RC造平屋建。昭和6年6月建設。詳細は不明。現在は、放置されたまま。

ロタ

- ・南洋興発ロタ製糖所汽罐室と煙道：昭和10年12月竣工。煉瓦造。耐火煉瓦は品川白煉瓦製。工事中の写真(『具志川市史編集資料13』)と図面の一部(月島機械所蔵)あり。現在は放置されたまま。
- ・南洋興発ロタ製糖所附属医院：RC造平屋建。建設年代、設計者ならびに内部の様子などの詳細は不明。現在は、ロタ高校の校内に放置されたまま。

5. まとめ

旧南洋群島の日本委任統治時代の建築活動を明らかにすることを目的として、主として旧南洋群島の西側の地域を対象として、建築物の残存状況を把握するために行った5次に亘る現地調査の結果をまとめた。

特に建築物の場合は、一度取り壊すと復元するには大きな困難を伴う。また、厳しい気候の中で、長年放置された建築物の劣化は激しい。一方で、このようなある種の文化遺産を修復し、保存するための現地のスタッフの数は少ない。如何に記録し、修復し、保存していくのかは、今後の大きな課題である。

なお、文中の「研究報告」の出典などは、辻原研究室のホームページを参照してください。

<http://www.pu-kumamoto.ac.jp/m-tsuji/>

また、e-mail(m-tsuji@pu-kumamoto.ac.jp)で問い合わせをいただいても結構です。